

達して居ると考へる。

四 諸宗典の發見

支那や中央亞細亞に行はれた宗教の經典で、從來殆んど、若くは全く知られなかつたものゝ發見されたことは、またその文化史上の大事件である、經典の種類より區別すれば、佛教基督教摩尼教經典の三種に分れ、その國語よりすれば前述のソグド・龜茲及び焉耆・于闐・回鶻・西夏と漢文との六種に分たれる、支那の書籍殊に佛教の求法僧等が親しく此の地方に旅行して見聞を書き付けた書物の中に、他の宗典については兎も角、少くとも佛典丈けについては此等諸種の翻譯に關して詳細の有様を傳へて居ないのは、誠に不可思議の次第と言はなければならぬ。

此等の宗典の中、數に於て最も多く發見せられて居るのは佛典であつた、就中漢文のもの最も多く、西夏文回鶻文のものが之に次いで居る、その他の三種の國語で書いたものは、今日迄に發表せられて居るものからいへば上の三者に及ばないやうである、併しながらこれは既に發表せられたもの、若くは自分の見聞したものに就いていふのであつて、實際歐洲各國に蒐集せられて居る各種の經典が、如何なる數量に上つて居るかは明らかには分らない、上述三種の印歐語の佛典も決して少からぬであらうが、研究の困難の爲に今尙ほ發表されないものが多いと信ずる、従つて此の有様は勿論各種佛典の分布の多少を示すものではない、殊に西夏文の佛典の如く一所に集まつて完全に保存せられて居つたものもあり、また今も埋没の状態にあり、或は既に湮滅に歸したのも少からぬとだから、從來發表されたものが曾て存在したものに對して數量の上から如何なる部分に當るかは全く不明である。さて此等の